山崎郷土報

NO. 117
23.8.20
兵庫県宍粟市山崎町
春名俊夫

続　逝きし人々のころ

鎌田裕明

（前号からの続き）

四　江戸山崎藩邸と大坂定番の比較
資料1　山崎藩大坂定番勤務藩士
資料2　山崎藩江戸在府藩士
五　人々のこと
（一）　学びの在番
（二）　弱き人々への思いやり
註
おわりに

四　江戸山崎藩邸と大坂定番の比較

江戸の山崎本多藩邸上屋敷は山崎藩主二代目の本多忠方以後、文治元（一八六四）年まで一三二年間にわたり日本橋蠣殻町一丁目（※16）に存続しました。山崎藩本多家は、徳川幕府創立時の功臣にして重臣である本多忠勝を先祖に持つ譜代大名の雄、本多一門の一家として明治に至ります。本論で焦点化している万延元（一八六〇）年には、山崎第八代藩主忠鄰の後嗣忠明が若殿様として父の名代（※17）を務めていました。

大坂城定番とは、大阪城警備の首班たる大坂城代に次ぐ職で、二名の大名が勤めた在職者平均約九年の職で、各与力三〇騎、同心百人を統括しました。補任された大名は城中に居し、蔵・鉄砲・弓、破損などの実務を担当する奉行を与力を以て担当させま

目次

続　逝きし人々のころ　……鎌田　裕明　……1
山崎闇斎座像の文化財指定について
……宍粟市教育委員会　……11
宍粟市山崎町鶴木の神社について　…　片山　昭悟　……16
宍粟鉄（千種鋼）は宍粟市の宝　……　河本　雅視　……21
事務局だより　……23
平成二十三・二十四年度役員名簿　……24

した。本多忠鄰は山崎からの六十名を超える家臣団を加えて城内の維持に努めています。また、この年十二月十二日城代が江戸出府で不在、忠鄰侯は月番であったので城代業務を果たしています（※18）。また、在任中は役料三千俵を給され、役宅は城内二の丸内の上屋敷、城外に中屋敷・下屋敷が与えられました。更に、来秋には将軍に御機嫌伺いの拝謁（※19）が予定されていました。

表作成上の留意事項は以下の通りです。①表の統計は全て財団法人本多記念館所蔵の万延元年『覚帳』の記述に拠りました。但し大坂の記録については、一部を『大坂定番記録（一）』編集・発行大坂城天守閣　二〇〇一年一月三一日刊を参考にしました。②大坂の褒美は六月七日の条、江戸は四月七日、と六月七日の条を中心にし、いくらかを前後の日の記述を参照しました。③褒美を下賜された藩士の氏名を特定した上でカウントしました（※20）。④褒美下賜の対象除外となった者は第一に、同地での勤務期間少なき者（各褒美の理由には『去年来』と一年以上同じ地で働いていることが必ず書かれています。）、第二に、差し控え中の者は加えられていません（※21）。

在所（山崎）についても考慮に入れながら、表によって特徴的なことを箇条書きにまとめてみます。

第一は、褒賞を下賜されたものの数です。江戸の藩邸では一三十八名でした。家族を加えると二〇〇名を超える山崎藩関係者の江戸滞府であったということでしょうか。大坂六三名は少ないで

大坂定番と江戸山崎藩邸の比較表（万延元・1860年）

	褒美をもらった人数	上下（具）	金貨		銀貨		銭（文）
			両	疋	匁	両	
大坂定番	63	4	21	2500	625	96	30750
江戸藩邸（4月）	79	0	0	1025	159	127	10496
江戸藩邸（6月）	131	9	56	1200	115	133	31184
計	273	13	77	4725	899	356	72430
原価（万円）			2310	360	1500	7653	281
大坂の占める比率	23	30	27	52	70	26	42

万延元年褒賞費総額１億２１０４万円＝１５４両＝１５７石

通貨の換算は「米や金の価格で割り出して現代の貨幣価値と比較するのはほとんど意味がない（※25）といわれているが、時代のトータルなイメージに描くには経済・政治及び社会の基礎構造に深く関わる要素であるがゆえに留保を付して基礎の要素と考えられる。大阪・江戸・山崎に同時代の米１石の価格、江戸の銭相場などを参考にして（※26）仮の、控えめな数字を提起しました。

すが、江戸のように中間や草履取り、小使いなど現地採用者の臨時的な者が除外されていることや、勤務期間の少ない（山崎との交流が繁く褒美漏れになる）者が多いことも考えられます。又、山崎藩の指揮下に配属された大坂城所属一三〇名の与力と同心からなる武士団と加えると大坂城での山崎藩関係者数は二三〇名を軽く超えていたと考えられます。又、この一三〇名の賞与は別口で大坂城からの支給であったと考えられます（※22）。三〇〇〇俵は一五〇〇石相当で、これでは一三〇名の武士団の年間経費たりえません。

第二は、下賜された三貨の種類は、藩士の地位に応じているということです。資料1、資料2を見れば、金貨を下賜された者、銀や銭を下賜された者の職務が截然と分かれていることに気づきます。

第三は、年間の褒美総額（江戸から大坂への移動支度金が一部加算されていますが）1億2104万円（※23）、米に換算すると157石です。これは江戸時代の鶴木村の総石高161石に近い数字です（※24）。

第四は、大坂での褒美総額は人数比を勘案すると相対的に高いということです。同じ傾向は金の疋、銀の匁による褒美についても言えます。大坂定番勤務者は、江戸詰め藩士に比べると、相当手厚く遇されていたということです。これは、藩侯の直接指揮下にあること、もう一つの定番玉造口のスタッフとのバランスの配慮があったように考えられます。

五　人々のこと

（一）学びの在番

大坂在番藩士には、選ばれて大坂城の警衛に当たるという緊張感があるとともに、志しある若者には江戸の最高学府たる昌平坂学問所に匹敵する学びの場との出会いの場でもありました。懐徳堂（※27）は関西の俊秀と町家の人々が、儒学を生活と実業に結びつけ修己治人を考究する学堂として、大坂はじめ西日本の文化活動の原点でもありました。特に、学則の「学問は忠孝を尽くし、職業に励むことを目的とする」、「書生の交わりは貴賤貧富を論ぜず同輩たるべし」に見られる実業と三綱五常の統一的認識と道を学ぶ者の平等にかかる宣言の開明性にはうたれます。此処に学んだ山片蟠桃、富永仲基そして頼山陽が経済や文化に果たした業績や、第四代学主中井竹山が松平定信の政治改革に与えた影響は広く知られているところです。

稲岡秋庭は「今橋通り心斎筋にて中井修治という者え学問修行のため、仕事の合間に通いたい」（※28）と伺いを出し、認められています。中井修治は、桐園と号し懐徳堂の事務総長の役である預人（あずかりびと）であった碩学（※29）です。秋庭は西日本の名門懐徳堂に学ぶこととなりました。稲岡が師とした中井桐園は時に三八歳、学者としての活躍の盛んなときでした。稲岡は十月十四日の映世大明神祭記念御練兵奉納では、演習部隊七十余名付医師として先輩で経験豊かな西村松園と共に活躍しています。そして、十二月には御奥様出産についての労を多とし金一朱（※30）の褒美を与

山崎藩大坂定番藩士　資料1

4	立花 実	公用方	銀三両、上下一具、通動一両二分	褒賞他に骨一折代銀一両　A
25	田中鑒	広間加番、取次、栄九郎様手本	銀二両、金百疋、銀三両、金一両	A
22	田中兵治	客応対、お子様お供	銀一両、銀十八目、金二分	冬以来勤A
55	直蔵	幔付	三百文	皆勤　出精　C
61	永井真喜蔵	御手同心、定若党	六百文	D
63	長尾卯兵衛		二百文	D
20	中瀬一郎	給仕、剣術世話方	銀二両、銀六目、通金一両	煩あり　A
17	永瀬彦惣	気根番、詰切、取次加	銀三両、五両、金一両	剣術世話方金一両　A
44	中村市次郎	門加番、棒術世話、	千六百五十文	小頭代、奥様御用、皆勤　C
53	中村三弥	茶番	六百五十文	皆勤　出精　C
41	中村房右衛門	宿番夜回り、お手同心、門番	三千百五十文	一人勤、皆勤　小頭以下御中間　C
62	中村福平	御手同心助お供	五百文、銀一両	D
60	中村平次郎	御手同心、定若党	六百文	御手同心、定若党　D
3	名嶋庄大夫	公用方	上下一具、銀三両、通動一両二分	褒賞他に骨一折代銀一両　A
19	名嶋太蔵	給仕、栄九郎様御世	銀一両、銀三十目、金一朱、通金一両	煩ありA
50	西山松太郎	棒術稽古	千三百五十文	御用多相勤、皆勤　C
27	野坂惣兵衛	紙に心用る、認め	銀三両、銀二十三匁、金一両	A
33	野中与七郎	お供、目明かし、夜回	銀二両、銀二両、同四十目	御徒目付仮役B
49	長谷川定治	棒術稽古	千文	御用多相勤　C
43	久住誉右衛門	門番、棒術世話	千四百五十文	皆勤　C
13	武間梅次郎	差番、客給仕、御次加	銀三十目、金一朱、通金一両、銀二両	A
21	武間一馬	客応対、お子様お供	銀一両、銀二十三目、金二分	冬以来勤A
9	冨和又右衛門	城内使者	上下一具、通動百五十疋	煩あるも動　A
38	堀口山加	詰切番、台子差番	銀六匁、同六十七目、銀一両	去年以来煩B
29	毛利半十郎	破損下役、目明かし夜	銀十二目、同三十目	B
34	森惠十郎	泊まり番、門開閉、剣術心懸	銀二両、銀四両、同三十目	B
2	安原清右衛門	御用人	真綿1把、金百疋、金二朱、銀七匁、金一両二分	城内居住、公用方支援、夜回り　A
6	吉田 幹	公用方	上下一具、金一五〇疋	A
51	若林武三郎	棒術稽古中之口番	千三百五十文	皆勤、押久太郎跡　C
1	馬場勘左右衛門	家老	真綿5把、金千疋	御前で下さる　御目見得
52	御上屋敷門番	堀廻り		C
56	お手廻り、陸尺、お馬屋計五		七百文づつ	皆勤　出精　C
57	浮人、奥小遣い計五人		五百文づつ	皆勤　出精　C
59	坊主　七人		二百文づつ	C
	人数計73名	(63+10)		

山崎藩大坂定番藩士　資料1

山崎藩大坂定番記録『覚帳』(安政7・万延元6月3日から)

NO	氏　名	職　務	褒　賞	備　考
7	浅井勇馬	破損方	銀三両、金百疋、銀三両、通動一両二分	褒賞他に骨一折代銀一両　A
10	熱田大七郎	吟味所、米役	金二朱、金二百疋、通金一両	煩あるも動、銀二両A
28	生田百十郎	作事、目明し、夜回り	銀一両、銀十六匁	御徒士、お勝手廻りB
18	磯部斧太郎		銀二両	
11	伊藤文左衛門	吟味所、米役	金二朱、金二百疋、通金一両	A
24	稲岡秋庭	お次加番、泊番、奥様お供	銀一両、銀七匁、金二百疋	冬以来A
31	岩崎一介	夜回り、門開け閉め	銀二両、同三両、銀三十目	B
39	浦上甚五郎	隙い・台子方、寄付加番	銀四両、同四十四目	去年以来煩B
14	榎本七大夫	差番、客給仕、御次加番	銀三十目、金一朱、通金一両、銀二両	A
32	遠藤由哉	夜回り、門開け閉め	銀二両、同三両、銀三十目	B
35	岡橋織江	泊まり番、門開閉、剣術心懸	銀二両、銀四両、同三十目	B
16	尾関　傅	気根番、詰切、取次加番	銀三両、五両、金一両	五嶋様家来同道A
12	小野源大夫	差番、客給仕、御次加番	銀三十目、金一朱、通金一両	煩あるも動A
15	香川和橘	差番、客給仕、御次加番	銀三十目、金一朱、通金一両、銀二両	A
8	片桐傳左衛門	城内使者	金百疋、通動一両二分	煩あるも動銀二両 骨代銀　一両A
30	加藤七郎治	夜回り、門開け閉め	銀二両、同三両、銀三十目	B
58	喜兵衛	御中間	七百文	皆勤　出精　C
40	笹倉甚左衛門	同心懸、寄附加番	銀六匁、同四両同四十四目	B
5	佐藤要人	御取次加番　公用方	上下一具、一両二分	A
54	佐野市右衛門	大部屋、日雇	弐千五百文	皆勤、肝煎り、一人勤　C
36	重村宗次郎	御用部屋、紙管理、寄付加番書役	銀10匁、同30目、同20目	小間使B
46	下村茂平治	宿番、門番	千百文	半年一人勤　C
45	庄愛助	宿番、門番、棒術稽古	千八百文	一人勤、女中付添　C
23	菅江運達	お次加番、泊番	銀二両、金一両	A
47	園田幸左衛門	宿番、門番、棒術世話	千七百文	皆勤　出精　C
37	高井一歩	台子酒部屋勤、障子張、供	銀六匁、同二両、同五十四目	去年以来煩B
26	竹原嘉内	紙に心用る、認め物、廣間加	銀三両、銀二十三匁、金一両	A
48	多田源之助	茶番、棒術稽古	千五十文	皆勤　出精　C
42	多田八左衛門	門番、棒術稽古	千三百五十文	半年一人勤、皆勤　C

山崎藩江戸藩邸藩士　資料2

江戸『覚帳』万延元年（安政７）６月７日から

（あいうえお順）

NO	氏　名	職務	褒賞	備考
72	笹倉富助	小頭以下	五百文	皆勤褒美
46	重村治四郎	御徒目付以下C	銀二両銀二両	出精
60	重村治四郎	A	金一両一分	秋在番支度金
47	志水宣次	御徒目付以下C	銀二両銀二両	出精
59	志水宅治	A	金一両一分	秋在番支度金
34	菅江春庵	D	銀五両上下一具	召し古し
8	杉山甫母	D		秋在番支度金5両
63	高井源治	A	金二両二分	秋在番支度金
67	中原友右衛門	A	金二両	秋在番支度金
13	多賀和平次	D	銀五両銀四両	秋在番支度金4両出精
38	田中繁蔵	D	銀5両銀4両	精勤
10	樽井勘平	公用方見習 D	銀十両銀四両	秋在番支度金4両出精
51	寺田喜門	御徒目付以下C	銀二両銀三両	若殿様御髪上銀十五匁
49	外村儀兵衛	御徒目付以下C	銀二両銀十五匁	出精
36	外村文太	D	銀五両上下一具	召し古し
56	外村文之進	御徒目付以下C	銀2両	文吉倅
70	仲嶋平治兵衛	A	金二両二分	秋在番支度金
1	西村六左衛門	御用人	役中増高二〇俵銀10両金1	御前にて御用人仰せ付け　出精
37	野口久蔵	D	銀五両上下一具	召し古し
50	野尻藤兵衛	御徒目付以下C	銀二両銀五両	出精
52	野中友右衛門	御徒目付以下C	銀二両銀十五匁	出精
22	野村由良多	D	銀五両銀四両	出精
25	長谷川要左衛門	D	銀五両銀四両	出精
54	原田和十郎	御徒目付以下C	銀3両	出精
18	藤岡三蔵	D　小納戸	銀五両銀四両	秋在番支度金4両
73	藤田藤三	B	五百文二百文	皆勤褒美
2	武間四郎右衛門	公用方	金10両銀10両	出精
14	武間助之進	D	銀五両銀四両	秋在番支度金4両出精
30	冨和只左衛門	D	金二百疋上下一具	精勤出精
3	堀内賢大夫	御目見得	支度料一五両	御前にて大坂への供仰せ付け精勤お菓子
64	堀口山嘉	A	金二両	秋在番支度金
16	毛利弥兵衛	D	銀五両銀四両	秋在番支度金4両出精
48	矢中清茶	御徒目付以下C	銀二両銀二十目	お酒部屋兼帯
31	矢中忠右衛門	D	銀五両上下一具	精勤出精
41	矢中友之丞	御徒目付以下C	銀1両銀1両	出精
19	山岡圭治	D		秋在番支度金4両
44	横井格之助	御徒目付以下C	銀1両銀1両	出精

山崎藩江戸藩邸藩士　資料2

江戸『覚帳』万延元年（安政７）６月７日から

（あいうえお順）

NO	氏　名	職務	褒賞	備考
11	浅井一郎治	D	銀五両銀四両	秋在番支度金4両出精
76	阿部久四郎　御大工	B	四百文四百五十文	皆勤褒美
42	安東儀兵衛	御徒目付以下C	銀1両銀1両	出精
7	安東伴右衛門	D		秋在番支度金5両
20	生田百十郎	D		秋在番支度金4両
71	池田茂吉	A	金二両二分	秋在番支度金
66	磯野常蔵	A	金二両	秋在番支度金
9	磯部嘉門	D	金二百疋	秋在番支度金4両
32	磯部勝之助	D	銀五両上下一具	召し古し
33	茨木永助	D	銀五両上下一具	召し古し
95	茨木助左衛門	D	銀五両役料四両	六月七日差控を解き褒美　秋在番
29	今村丹左兵衛	D	銀五両上下一具	精勤出精
35	今村弥平次	D	銀5両	
26	岩崎幸右衛門	D	金二百疋銀四両	出精
5	岩崎里見	D	真綿三把金10両	秋在番支度金5両
23	鵜野吉兵衛	D	銀五両銀四両	出精
39	江見菅左衛門	御徒目付御歩行以	銀20匁・30匁	御賄い兼帯
15	岡橋清右衛門	D	銀五両銀四両	秋在番支度金4両出精
12	尾関助右衛門	D	銀五両銀四両	秋在番支度金4両出精
24	香川儀蔵	D	銀五両銀四両	出精
27	香川新助	D	銀一枚金二百疋	秋在番支度金4両
17	香川和七	D	銀五両銀四両	秋在番支度金4両出精
28	岡橋弥之助	D	金二百疋上下一具	精勤出精
57	木村卯太郎	御徒目付以下C	銀3両銀2両	精勤
53	木村退右衛門	御徒目付以下C	銀二両銀三両	出精
45	木村勇七	御徒目付以下C	銀1両銀1両	秋在番支度金二両二分
62	木村勇七	A	金二両二分	秋在番支度金
55	木村里右衛門	御徒目付以下C	銀2両	出精
68	野尻叙四郎	A	金二両	秋在番支度金
65	黒田要悦	A	金二両	秋在番支度金
21	小泉逼治	D		秋在番支度金4両
58	小嶋半兵衛	御徒目付以下　A	金3両	勝手廻りなど秋在番支度金
61	坂牧平八郎	A	金二両二分	秋在番支度金
69	笹倉富之助	A	金二両二分	秋在番支度金

資料について

1　大坂と江戸は口述者（家老）が異なっており、記載のニュアンスが違い、資料にも若干の差異がある。

2　左端のNαは『覚帳』の記載順である。あいうえお順配列は利用の便に配慮した。

3　褒賞について金１両、金１００疋、銀１両などは支給の項目（本欄省略）が、「出精につき」「人少なで精勤」「通勤」などがあったが省略した。金銀が、重ねて多いのは評価される項目の多さによる。

また匁と目は同義だが、通常３０目以上は目、以下は匁と記されることが多い。

4　備考について、資料２で在番支度金とは、江戸から大坂城定番に移るための準備経費。

肴代は功績に対し特別に給された。「通」は通勤に対する手当と考えられる。

5　名簿は全員を網羅できていない。今後データの入力に努めたい。

6　大坂定番藩士への褒賞は４月、６月についてのもので、１年を通じて整理すると、藩政の課題などがうかがえます。例えば大坂で１０月１０日「武間四郎左衛門、松井連、馬場勘左衛門に褒美が与えられました。」これは、千草屋宗十郎の賄い金引き受け受諾交渉の成功に勤めた幹部に対するものです。千草屋宗十郎は、当時大坂商人の中でも五指に入る豪商でした。財政難に苦しむ藩の賄い金（経常経費）の引き受けは大きな安心でした。千草とゆかり深い宗十郎と山崎藩の関わりは好個の研究テーマでもあります。

山崎藩江戸藩邸藩士				資料2
	江戸『覚帳』万延元年（安政７）6月7日から			
				(あいうえお順)
NO	氏　名	職務	褒賞	備考
40	横尾幸之助	御徒目付以下C	銀1両銀1両	出精
74	横野彦兵衛	B	五百文七百文	皆勤褒美
4	吉住伝次右衛門	D	真綿三把金二百疋	人少な出精若殿様お付き 精勤
6	吉田矢柄	D	金10両銀10両	秋在番支度金5両
75	新蔵　杖突	B	四百文六百文	皆勤褒美
77	お手廻り四人	B	百文百文四百文	
78	御鳥取り四人	B	百文二百五十文二百文	若殿様御給仕
79	御側衆六人	B	百文二百五十文外百五十文	両人出精外の額支給
80	草履取り　二人	B	百文二百五十文	
81	七助　小使い	B	百文二百文	
82	市兵衛　小使い	B	百文七十文	
83	御上屋敷不寝番三人	B	百文	
84	御下屋敷不寝番二人	B	百文　七十二文	
85	孫七　御作事手伝	B	三百文三百文五百文	屋根修理などに出精
86	御中間　二十人	B	百文　二百五十文	駕籠
87	御中間　八人	B	百文百七十文	駕籠
88	番　四人	B	百文百文	
89	割場宿番	B	百文二百文	買い物
90	御家中坊主　六人	B	百文　七十文	
91	御茶部屋御中間	B	百文百文	
92	御作事道具番	B	百文　七十文	
93	御中間御下男 各一	B	二貫文ずつ	大坂え罷り越す
94	御下回り	B	二貫百文	大坂え罷り越す
	総人数144(93+51)人			

えられています。

他に、この年稲岡が学びの願いを出した同じ八月、磯部斧太郎が梶木町の後藤春蔵の所へ御用の透をみて通いたいと願い出、十一月には名嶋太蔵が同じ梶木町の後藤松陰の所で読み書き修行をしたい（※31）との願を出し、許可されています。ちなみにこの二名は映世大明神祭記念御練兵奉納部隊では、磯部が弓、名嶋が槍を持って演習に参加しています。

万延元年八月は在坂山崎藩の若者達が相次いで、深い学びの門を叩いた年であったのです。

他方、在所の山崎では六の日に講釈が実施されたことが記されています。三月六日「講釈之有り」同じく一六日、同文という具合です。また閏三月一六日「講釈之有り」とあります。誰がどんな講釈をしたかは『覚帳』の文面からは分かりませんが、山崎藩に於ける学びの歴史と伝統について、播磨に七つしかない藩校（思斎館）（※32）があったことや前述した稲岡秋庭・磯部斧太郎・名嶋太蔵の学びも視野に入れながら、再評価されねばならぬのではと思います。

（二）弱き人たちへの思いやり

第一章で、山崎藩の高齢藩士への特徴的な対応について若干の紹介をしましたが、此処では大坂定番藩士の遺族及び体調不良や高齢の藩士の帰郷についてみます。

毛利半十郎が病気養生叶わず亡くなったのは六月二十七日です（※33）。その一ヶ月ばかり後の八月二日、遺族が大坂から山崎へ帰るについて手当金二両一分を給し、乗り駕籠を寡婦と老母に各一挺、子ども二人に一挺、荷馬一匹、御中間一人を給したと記されています（※34）。大坂から山崎まで三日間の行程を駕籠で帰るよう手当てされているのには驚きます。さらなる驚きは、毛利半十郎が上級藩士ではなく、褒美が下賜されたとき「資料1」№29から分かるとおり二十九番目に記されていた破損下役・目明かしを勤めていた藩士だったことです。類例がもう一つあります。、御足軽永井真喜蔵「資料一」№61の死後、家内の在所への帰還に係る手当です（※35）。家族は配偶者一人ですが、毛利半十郎の遺族対応とほぼ同レベルの内容です。

目を引くのは、毛利半十郎の家族の場合（永井真喜蔵の妻の場合も厚遇は同じです）、大坂から山崎まで、約一〇〇km、破損下役の妻が夫を亡くし、老母、子ども二人を連れ家財道具を持って山崎へ帰る。その為に藩は、乗り駕籠三丁に中間をつけ、金二両を給しています。夫の死後、遺族の帰郷は駕籠、些かの慰めとなったことと思われます。

六月二日、遠藤由哉「資料1」№32は異動で在所へ帰ることになっていたが、足痛で歩行困難。自費で駕籠にて山崎へ帰りたいと願い出たが、困窮者故金二分拝借願いたいとのことでした。藩侯のお耳に達し、やむを得ないとの思し召しで認められました（※36）。

六月四日、熱田大七郎「資料1」№10は歳七〇余り、馬での帰

郷は難儀、自費で駕籠の用意をして帰りたいと願い出ました。回答は荷物のこともあるので人足二人をつけてやるとの思し召しでした。その際、本人からの一日分経費は自分賄い（※37）との願いがお聞き届けられたとあります。熱田は「現役藩士、財務の部門を統括、藩侯から褒賞に際し、金銭に厳正であると賞辞を得た」と前掲資料は記しています。

以上高齢の藩士や寡婦となった妻に対する山崎藩の手厚い配慮の例をやや冗長に堕すのを厭わず列挙しました。藩士に対する藩政は幕末期、特に縦の身分制や半知借り上げをはじめ本来苛政であるという言説がありますが、上述の例は、その反証であるように思えます。

本稿は財団法人本多記念館の「本多藩時代の山崎」第三集に発表したものに加筆したものです。

註

※16　山崎藩江戸屋敷については、拙稿「寛政元年江戸『覚帳』」十四頁　本多藩時代の山崎（第2集）に収載

※17　江戸『覚帳』一月朔日の若殿様の御登城はご名代としてのことでありました。

※18　大坂『覚帳』十二月十二日の条　「追手様（城代のこと）御発駕につき七ツ時過ぎ御供揃いて御同所様えお出で成られ、御出立後・・」　とあり、二日前の十日の条では、餞別代銀三枚と金七百疋（鮮鯛、干鯛など代金含む）枚方までの見送りを公用方に命じています。なお、城代松平直義（丹波亀山五万石）はこの月二十八日に大老に就任します。

※19　大坂『覚帳』十二月二日の条では忠鄰の来秋御参府（江戸の将軍へ御機嫌伺いに行くこと）が認められたと披露されるとあります。

これより六日前の十一月二六日の条、「殿様御登城後来年にて五年、来年秋か冬に御機嫌伺いに御参府のこと伺っていたところ老中奉書で、伺いの通りでと書状が来た」とあります。

※20　資料2、山崎藩江戸藩邸勤務者（六月七日褒美を下賜されたもの）資料1　山崎藩大坂定番勤務者（六月三日褒美を下賜されたもの）

※21　差し控えは、藩士として不適格な言動や非違行為があったとき、当事者もしくは上司、一族など係累の者が、そのことについて命によったり自主的にであったりの違いはありますが、謹慎し反省や遺憾の意を示すこと。

※22　菅良樹氏（『慶応期の大坂定番について』地方史研究三一三号）によれば大坂城所属者は①地役人。破損奉行、材木奉行、鉄砲奉行、弓奉行、金奉行などで、江戸に屋敷を有する幕臣で格式は御目見得以上、二〇〇～七〇〇俵。②与力三〇騎、忠鄰配下で原則八〇俵を給され、山崎藩士では用人クラスを超える上級武士に相当した。③同心一〇〇人、各禄高一〇石三人扶持。②③が忠鄰配下に編入されました。

※23　勢価格換算は厳密に考えると不可知論に陥ります。①労賃

でする場合、例えば大工賃、今日は電動器具やレッカー車を駆使する大工さんが普通です。器具への投資回収費を含む賃金と江戸期の専門技能への対価としての賃金は労働の質と量が違うので比較は難しい。②米の価格でする場合、第一に今日の自由競争で決まる価格と幕府による公定価格が存在し、第二に大坂や江戸と生産地価格という多重価格の存在という状況。第三に主食としての地位は、今日は低く江戸期は高い、第四に米作労働の質が違う。これで比較可能か。ここでは、私なりの論点整理を踏まえた上で、次の資料を活用します。

「町方地子米値段①石一二七匁に相立ち候の段奉行申し聞き候」　（国元『覚帳』三月二二日の条）。

これに対し地方史研究協議会編『近世地方史研究入門』岩波一九六二年版　三〇〇頁は「京都では、春に②白米一石一四六・五匁」　としています。

また、同じ地方史研究協議会編『地方史研究必携』岩波一九六〇年は、「江戸の銭相場が③一両につき銀八二・三八　匁、銭七五七九文」としています。

他方、六月二四日の江戸『覚帳』は「来月御家中扶持米、美濃米を④一両当たり四斗二升で買った。」とあり、また大坂では『覚帳』五月十四日の条で、「御役料米を受け取り、残り御払い米は⑤石に付百四十匁」とあります。

また古島敏雄は「商品流通の発展と領主経済」岩波一九六七年版日本歴史　近世四、九八頁で、「幕府経済の主要収入源別構成の比重」を知るための換算で、金一両を銀六〇匁、米一石は御張り紙値段の天保一四年平均一〇〇俵当たり三六両三三の近似値として一石　一・一両⑥とします。

換算の実際

換算しょうとする数字について今回のように関連する史料がある場合、その史料を用いる方法と、一般的な指標を使う方法があります。一般的な指標の例は、先に示した「大坂定番と江戸山崎藩邸の比較」の表のケースで、詳細は※18で示しています。以下史料を使って両と石高を算出。

先ず金四〇〇疋及び銭七五〇〇文は一両、銀一両は銀四三匁とします。また、一両当たり四・二斗④（④を元に算出以下同様）。　米一石は銀一三四匁①と⑤、そして金二・四両④を基準とします。

褒美総額で購入できる米は、金八九両⑦で三七石。銀一六・二〇七匁で一二一石。銭七二・四貫は九・六両⑧で米四石。あわせて一五六・九石となります。金貨は、銀が一三四匁を一両として一六二〇七匁は二七〇両⑦になり銭・銀・金を合わせて三六八・五両となります。

※24　『山崎町史』　四七九頁

※25　石川英輔　『大名と庶民の街道物語』新人物往来社二〇〇九年版一六〇頁

※26　万延元年の山崎藩が褒賞として藩士に給した金品の石高換算値がかくも差があると困ってしまいます。※16と※23の違

いについては①価格体系の基本である米一石と金一両の交換が一貫していなかった。例えば、江戸『覚帳』の、一両で四斗二升（六月二四日の条）のように一両の価値の下落があり、その価格変動は民政の課題でした。②金一両が現価一〇～三〇万円と幅のある換算値の現況、などによるものと思われます。

※27　懐徳堂については、脇田修・岸田知子『懐徳堂とその人びと』大阪大学出版会二〇〇七年版参照『論語』里仁篇の「君子は徳を思い、小人は土を思う」に由来する懐徳堂の学びとその成果が紹介されています。

※28　稲岡秋庭は大坂『覚帳』に拠ると、八月十二日　懐徳堂への学びについて許可を申請し、あわせて在所の父看病に十日間の帰国許可を願っています。同月二十七日父の死、そして二ヶ月後、十一月二十七日父の名秋平の襲名許可を得ています。

※29　預かり人には脇田修・岸田和子『前掲書』五六頁参照
三宅桐園については、懐徳堂友の会編、『懐徳堂ー浪華の学問所』大阪大学出版会　平成一三年版一七頁

※30　十二月二十七日の条　馬場勘左衛門、安原清左衛門、西村松園に次ぐ褒美でした。

※31　磯野斧太郎は資料1でNo18、名嶋太蔵は同じくNo19にしるされています。また映世大明神祭記念練兵については大坂『覚帳』十月四日の条にあります。

※32　当時の藩校は『兵庫県史』昭和56年版　第5巻212・213頁

※33　毛利半十郎について、大坂『覚帳』六月二七日の条「毛利半十郎病気養生相叶わず、今夕酉の刻死去仕り候」とあります。

※34　大坂『覚帳』八月二日の条

※35　永井真喜蔵の家内についても、大坂『覚帳』八月二日の条に記されており、「資料1」No61に出ています。

※36　遠藤由哉について、大坂『覚帳』六月二日の条　資料1のNo32

※37　熱田大七郎について、大坂『覚帳』六月四日の条。前出の永井真喜蔵と遠藤由哉と違って歳七〇余り、米役の上級藩士（「資料1」）、自費で駕籠との発想は藩の食を預かる自覚がうかがえます。高齢で大坂勤務には驚きです。

おわりに

良寛の詩に「円通寺に来たってより、幾回か冬春を経たる。・・」というのがあります。私も幾回か季節の巡りを経るなか、多くの先学や尊敬すべき師友に出会う幸せを頂いてきました。この間、本稿を成すもととなった山崎藩の公文記録を学習会のなかで読む機会を得、爾後、この資料の中に、暮らしや仕事と向き合って生きた往時の人たちの姿を想像しながら楽しい時を過ごしてきました。そして、有り難いことに今年も桜咲く春の充実を実感しなが

ら拙文を閉じる時に至りました。

此処で私の基本的な立場に触れておきます。標題でお気づきの通り私が書こうとしたのは人々のことです。人の一生は喜怒哀楽、希望と挫折、そして栄光と低迷の繰り返しです。そんな人生を、せめて明るい、ポジティブな面を見ていきたいということです。事実がどうであったかとか、制度やシステムの分析も勿論大切なテーマですが、それらを構成し、つくっていた人間についての関心を持ち続けたいと思うのです。

大坂城での軍役につく磯部斧之助や名嶋太蔵が「御役の透(す)きを見て」学塾に通いたいという記録を読むと、彼等の志の大きさや青春の高揚に深い共感を覚えます。また、営造物管理を統括していた浅井勇馬が「気が衰え眼も薄くなった」と免職を願い出、お勝手廻りという現場の職を全うしていた七〇歳を超える遠藤弥太治が「腰痛があって歩行も不自由」と引退の意志を告げる文に出会うと、老いのわびしさにうたれます。

いずれにしても、時を超えて、高齢者達が自己抑制と矜持ある生を全うしているさまに触れ、また、若者達が知に対する憧れをもって学びを志す姿に出会うことで、私は彼等にあつい敬意と限りない懐かしさを感じ、生きる力をもらったように思うのです。

山崎闇斎坐像の文化財指定に寄せて

宍粟市教育委員会

はじめに

このたび宍粟市教育委員会では、市の所有で山崎歴史郷土館にて展示を行っている山崎闇斎坐像を、市有形文化財（美術工芸品－彫刻）として指定する事に決定しました。

この坐像は昭和三十五年（一九六〇）十一月、文化勲章を受章した作家の吉川英治氏から旧山崎町へ寄贈されたもので、その背面には旧蔵者である江戸中期の儒学者伊藤善韶の所持銘が入れられています。また共箱の蓋には、明治・大正期の政治家で宮内大臣等を務めた渡邊千秋の讃が記されており、その来歴を知る上でも貴重な資料といえます。

今回の文化財指定にあたり、事前に経年劣化防止のための修繕を実施し、また専門家による若干の所見を得ましたので、簡単ではございますが、この場をお借りしてご紹介させていただきます。

一　山崎闇斎について

山崎闇斎は、名を嘉、字を敬義、通称を嘉右衛門といい、元和四年（一六一八）鍼医を生業とする浪人浄因の末男として京都に生まれました。闇斎の撰述した『山崎家譜』によると曽祖父浄榮は播州の人であり、祖父浄泉が弘治三年（一五

五七）宍粟郡山崎村に生まれ、二十四歳より木下家定に仕えたといいます。また父浄因は天正十五年（一五八七）泉州岸和田に生まれ、十一歳から木下家定ついでその子利房に仕えましたが、後に辞去して京都に移り住み鍼医となったとされています。このことから、闇斎自身は直接山崎の出身ではありませんが、祖先の出身地に因んで山崎を姓とし、そこの生まれを自称したと考えられています。

闇斎は幼少時に比叡山に登って侍童となり、その後妙心寺に入って出家しましたが、のち土佐吸江寺（臨済宗・高知県高知市）に移って南学派朱子学の祖である谷時中に儒学を習い、土佐藩の家老を務めた野中兼山らと交流しました。その後京都に戻って、明暦元年（一六五五）私宅で塾を開講し多くの門人を集めたといわれます。

また寛文五年（一六六五）頃、徳川四代将軍家綱の執政を務めた会津藩主保科正之から礼遇を受けたことでさらにその声望は高まり、京都・江戸の間を往復しながら精力的に講義・著述活動を展開し、その門人は六千人を数えたといわれています。また一方では神道家吉川惟足に学び、神儒一致とする独自の神道説（垂加神道）を唱えました。

闇斎は天和二年（一六八二）に没しましたが、彼を学祖とする崎門学派の思想は多くの弟子達を通じて広まり、江戸時代中期以降、特に幕末の尊皇論に大きな影響を与えたことで知られています。

なお、闇斎の墓は金戒光明寺（浄土宗・京都市左京区）にあり、下御霊神社（同中京区）には闇斎を祀った垂加神社があります。また山崎町西鹿沢にも山崎闇斎を祀る山崎闇斎神社がありますが、この社は昭和十五年に地元有志の手によって京都の垂加社から分霊を迎え、当時「闇斎屋敷」と伝承されていた場所に建立されたものです。

二　闇斎坐像について

山崎歴史郷土館で展示されている山崎闇斎坐像は、像高三十九・〇cm、横幅四十四・〇cm、奥行が三十二・五cmあり、複数の材木を張り合わせる寄木造りという手法で作られています。表面は彩色され漆が塗られており、当初右手には何か（闇斎神社の石像は扇子と推定復元）が握られていたようですが、残念ながら寄贈された時点で既に失われていました。

またこの坐像には共箱が付属しており、その表蓋には明治三十七年一月、当代の政治家で宮内大臣・京都府知事等の要職を務めた渡邊千秋が「山崎闇斎先生　坐像　一基」として漢文の讃を記しています。箱自体は明治以降に作られた物と考えられますが、これも坐像の来歴を知る上での貴重な資料です。

さて、この闇斎坐像は通常正面からしか見学することができませんが、実はその背中には以下のような朱書文があります。

山崎闇斎先生像

略伝播州宍粟郡山崎村人京師移
住初妙心寺僧絶蔵主云後土佐住
谷時中学爰至髪復儒成故土佐
去又京師住晩年神道帰

余深愛此像　　伊藤善韶所蔵（花押）

初めに略伝とあるように簡素な文章ですが、ほぼ正確にその事績が記されており、特に闇斎が宍粟郡山崎村の人であると明記されている点が注目されます。前述のとおり実際には祖父の出身地が山崎だったようですが、闇斎自身がその出身を自称していたとことからこのように記載されたのでしょう。

最後に「余深愛此像」（余深く此の像を愛す）と署名花押（サイン）を据えている人物は、この坐像の元の所蔵者で伊藤善韶という儒学者です。詳しくは後で述べますが、善韶は江戸時代中期の人ですので、この銘文の記載が本人のものであれば、坐像の製作年代は闇斎の生前から善韶の死没までの間、およそ十八世紀中期から十九世紀初頭までの時期と推定することができます。

肖像彫刻として見ると、頬骨の張った四角い顔、精悍なその面持ちは見る人に思想家闇斎の厳格な姿を想起させます。しかし、この面相は見様によっては不思議と柔和にも映り、俗に「弟子六千人」と称されたその人望を垣間見ることができます。また手の甲に浮いた血管や首筋の肌の表現は、闇斎という人の身的な特徴が写実的に表現されています。なお、京都の出雲路（いずもじ）家が所蔵する闇斎の画像は、総髪姿ではありますが顔の骨格などが似通った姿をしており、仮に背銘を抜きにしたとしても、この坐像が江戸時代に製作された闇斎の肖像である可能性は高いと考えられます。

昨年度、寄贈から五〇年が経過し表面の塗料や漆に幾分かの劣化が見られたことから、専門業者に依頼してこれ以上の劣化を防止する修理を実施しました。ところが、その際に行ったレントゲン撮影で内部に像を接合するため数十本の丸釘（洋釘）が使用されていることが判明しました。日本における丸釘の使用は明治時代以降のことですので、吉川英治氏の寄贈以前に少なくとも一度は解体修理が行われていたことが想定されます。

ただ、この近代の解体修理は彫刻としての表向きの価値を大きく損なうものではなく、専門家からも江戸時代の肖像彫刻としてなかなかに優れた作品であり、像の表現手法からおそらくは京都の仏師の手による作品ではないか、という評価を受けていました。教育委員会ではこうした点を踏まえ闇斎座像を歴史・芸術上価値の高いものと判断し、有形文化財指定して後世まで保存していくこととしました。

三　闇斎と伊藤善韶

闇斎坐像の所有者であった伊藤善韶（号東所（とうしょ））は、古義学

派の祖として有名な伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）の孫にあたり、仁斎の子伊藤東涯（一六七〇～一七三六）の三男として享保十五年（一七三〇）に生まれました。しかし、幼少時に父を亡くしたため叔父の伊藤蘭嵎などから教示を受けて古義堂三世となりました。

この古義堂宗家は諸大名からの招聘に消極的な傾向にあったといわれますが、善韶は挙母藩（愛知県豊田市）藩主内藤学文の招きで、天明七年（一七八七）に創設された藩校崇化館の初代学頭を務めました。しかし、寛政二年（一七九〇）門弟に学頭を譲り藩校を辞して京都に戻りました。その後、寛政九年（一七九七）には父の遺作『制度通』を刊行するなど父祖の学績整理に努め文化元年（一八〇四）に没しました。

山崎闇斎と伊藤善韶、この両者の生没年には五〇年近い開きがあり、直接の面識があったとは考えられません。しかし、京の山崎闇斎邸は「上京区葭屋町通下立売上ル」にあり、善韶の祖父伊藤仁斎の古義堂は同じ上京区で堀川を隔てた「堀川下立売上ル」という至近にあったことから、同時代人である闇斎と仁斎の間には日常的に交流があったのではないかとも推測されます。

また伊藤仁斎の二男梅宇は闇斎の学問を高く評価していたといわれますので、こうした経緯が学派の異なる伊藤善韶をして闇斎の木像を所蔵し、「余深愛此像」という敬慕の情を抱かせたのではないかと推測されます。

四　闇斎坐像寄贈の経緯

闇斎坐像は、昭和三十年代の初め政治評論家の嘉治隆一氏によって、東京本郷の古書店で偶然発見されました。当時、嘉治氏は山崎の文化サークル新潮会と交流があり、早速この坐像のことを会員に話して入手を約束しましたが、暫くのあいだ果たせずにいました。

しかし、嘉治氏がこの件を『宮本武蔵』『新・平家物語』などの大作で知られる作家の吉川英治氏に語ったところ、吉川氏は闇斎座像が由縁の無い土地へ流出してしまうことを危惧し、自らこれを入手して山崎へ寄贈したいと申し入れられました。こうして、昭和三十五年十一月二二日、闇斎座像は新潮会の斡旋を得て山崎町へ寄贈されることとなったのです。

文化勲章受章日にあたる同年十一月三日付の吉川氏直筆「奉献の辞」には、次のようにあります。

奉献ノ辞

所伝　本尊像ハ元　伊藤仁斎先生ノ」嫡孫善韶号東所先生ノ愛蔵」セラレシモノ也ト」

畏友嘉治隆一氏　偶々東都一書店ノ書肆中ニ是ヲ発見　流転」隔世ノ遭遇唯ナラズトシテ　珍重收」拾　移シテ　山崎闇斎先生ノ郷土」旧山水ノ裡ニ安カラシム」

即チ　ソノ芳施ノ奇縁ト郷人ノ」景仰トニ随参シテ　茲ニ安座シ」奉ルノ経路ヲ識ス」

昭和三十五年十一月
文化ノ日　吉川英治書

ここには先述の嘉治氏による闇斎坐像発見の経緯と、吉川氏の寄贈に至る「山崎闇斎先生ノ郷土　旧山水ノ裡ニ安カラシム」という心遣いが綴られており、これもまた箱蓋に記された渡邊千秋の讃と共に、闇斎坐像の歴史を語る上で重要な資料といえるでしょう。

おわりに

以上、山崎闇斎と闇斎坐像について粗略ではございますがご説明申しあげました。これまでこの像の存在については、地元でもそれ程知名度が高いとはいえず、「吉川英治寄贈」という点で話には聞いているが現物を見たことがあるという方は少なかったように思われます。また、闇斎の思想は非常に難解なため、それが一般には興味を持ち難い要因にもなっていたことも考えられます。

しかし、このたびの指定により山崎闇斎坐像は宍粟市・市民共有の文化遺産として位置付けられましたので、山崎歴史郷土館に御来館の際は、その思想等については一先ず置いて、肖像彫刻の逸品として是非これをご鑑賞頂きたいと思います。

最後になりますが、私たちは今後ともこうした郷土ゆかりの人物の行跡を解明していくことは元より、今現在も刻々と忘れ去られていこうとしている地域の歴史を伝えていくための努力を続けていかなくてはなりません。今回の闇斎座像の文化財指定が、そのような活動の端緒となれば幸いです。

（※山崎闇斎坐像は資料保存のため毎年七月一日～九月三〇日までの間展示を休止しています。）

参考文献

和田疎人「山崎町に還った闇斎像」（『宍粟郷土研究会報』九号）宍粟郷土研究会　一九六一年
安井寅一「闇斎神社の由来」（『播磨』五十三号）西播史談会　一九六二年
嘉治隆一「山崎闇斎像」（『人と心と旅』）朝日新聞社　一九七三年
島田　清『山崎闇斎先生と播磨の門流』山崎町観光協会　一九八二年
山崎闇斎研究会・山崎闇斎奉賛会「闇斎神社と山崎闇斎についてNo.1～3」自費　二〇〇六年～二〇一一年
『国史大辞典』第一版　吉川弘文館　一九九三年

闇斉座像正面

宍粟市山崎町鶴木の神社について

片山昭悟

一、はじめに

宍粟市山崎町鶴木については、以前より関心をもっていた。建部恵潤「宍粟郡大字名私考」『歴史と神戸　地名研究（4）』一六〇号一九九二によると、

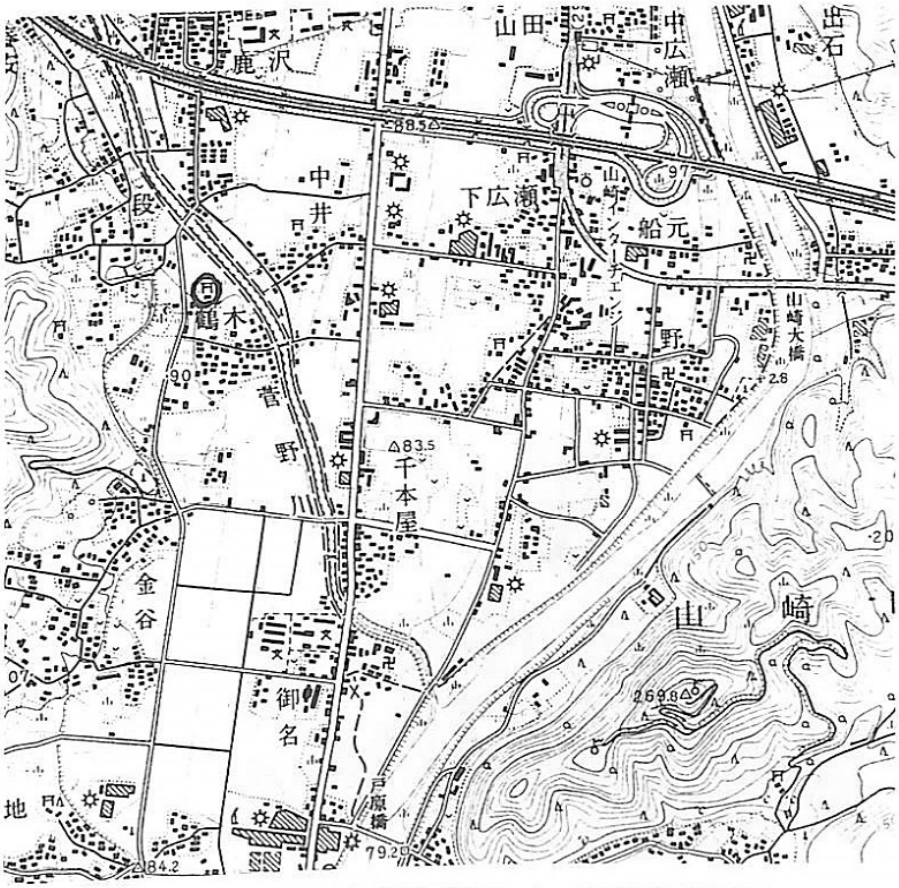
「鶴木」は、菅野川沿いの村ツル（都留）キワ（際）の水流で、菅野川を指し菅野川の傍らの集落の意とみられるとされている。

私は「鶴木」が「剣」に置き換えられるとも考えられることからこれまで調査していたが、剣村を鶴木と改めたことや鶴木大明神については、「ふるさとの民話」『城下小学校百周年記念誌』並びに『しそうの逸話』39に詳しく紹介されている。

『播磨鑑』にも「鶴木社」のことが記載されている。鶴木社の祭神が天國之御劔ナリとされることから調査していると、これに関連して天國の御剣については、松平定信編『集古十種』兵器類の刀劔に絵図がみられる。天國の剣については、宍粟郷土研究会の『会報十号』昭和三十六年（一九六一）にも紹介されている。

杉山義昭氏が「宍粟郡鶴木神社由緒」を西播史談会の『播磨』に紹介されている

今回、鶴木の神社について資料をもとに紹介させていただいた。



地図１　金比羅神社位置図　1／25000「安志」

二、『播磨鑑』の「鶴木社」について

『播磨鑑』は、江戸時代中期の宝暦十二年（一七六二）播州平津の平野庸脩によって編集されている。「鶴木社」のことは、明治四十二年（一九〇九）十月、播磨史談会発行の「播磨鑑宍粟郡之部四」に記載されている。

『播磨鑑』によると、

「鶴木社」　鶴木村ニアリ山崎ヨリ十丁南方
祭神　天國之御劔ナリ一説ニ日本武尊ヲ祭トモ云フ
是ハ元来吉野ノ南帝之御持物ナリ中村石見眞島奉奪取北帝ヘ捧
シ御劔也ト云フ
外ニ鴛ノ御劔一振ハ中村持帰カヘリシ刀神ニ祝ヒ祀ラントテ小
社ヲ營ミテ劔ノ
宮ト云其後池田宰相輝政之領國トナリシ節文字ヲ改テ鶴木ノ字
ニナリシタリト
云此神劔今ハナシ
○寛政年中白川侯松平越中守定信ヨリ山崎侯本多肥後守忠可ヘ
被仰越南帝御所
持ノ鴛ノ御劔山崎ノ町人千草屋平瀬彌四郎ト云者持伝フ由拝見
申度候差越可申
段被越候則吟味有之候所町家平瀬彌四郎同彌七両人ニテ持候得
共彌七ハ當國高
砂浦ヘ引越候ニ付彌四郎ヲ使トシテ白川侯ヘ被遣ケリ一覧ノ上
直ニ返サレ候近
年内々ニテ賣払ヒ候由此劔疑ラクハ劔ノ社ノ神体ナルヘキカ」

とあり、

「鶴木社」は鶴木村にある。山崎より十丁（約一キロメートル）南にあり、祭神は、天國之御剣なり、一説には日本武尊を祭るとも言う。この剣は元来、吉野の南朝の御持物なり。これを中村石見眞島が奪取り北朝へ捧し御剣也と言う。ほかに鴛の御剣一振は中村持帰って刀を神に祝い祀らんと小社を營みて剣の宮と言う。その後、池田宰相輝政の領地となったときに文字を改めて「鶴木」の字になったという。この神剣は今はなしとあり、「鶴木社」のことが詳しく記載されている。

『播磨鑑』は、江戸時代中期の宝暦十二年（一七六二）播州平津の平野庸脩によって編集されている。播磨のことが記録されている。

「鶴木社」のことは、明治四十二年（一九〇九）発行に記載されていることから紹介させていただいた。

三、「天國の御剣」について

天國の御剣については、松平定信編『集古十種』兵器類　刀劔に、

「或家蔵太刀図　播磨國宍粟郡山崎町　平瀬■蔵天國刀図」があり、

「握長七寸、三寸五分　鞘長　二尺三寸　銘　天國」

長二尺六寸五分　六寸一分　石卅毛ヌキ形ヲ銅ニテ埋目クギ穴ヲ穿」と記載さ

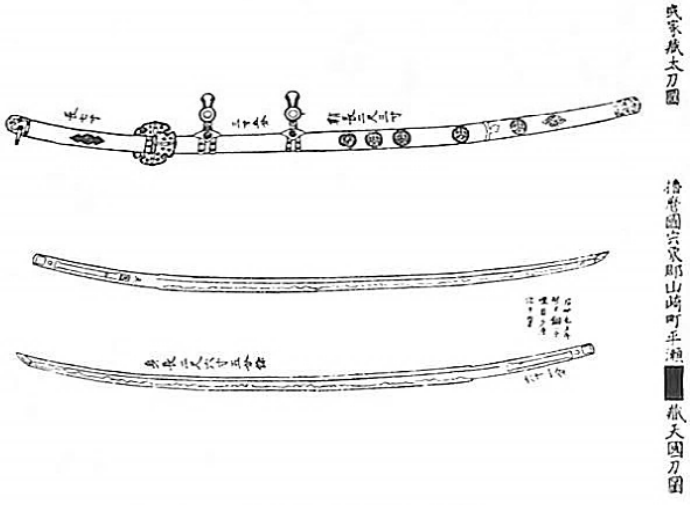


図１　『集古十種』より

れている。平瀬■蔵の一字は、伏せ字である。

或家蔵太刀図、播磨國宍粟郡山崎町平瀬■蔵の天國刀図は、大刀で兵庫鎖の大刀と思われる絵図が記載されているので紹介する。

四、『播磨鑑』に記載されている平瀬彌四郎について

平瀬彌四郎について説明すると、

『特別展　なにわ人物展　没後１００年　最後の粋人　平瀬露香』大阪歴史博物館　二〇〇八の「千草屋平瀬家略系図」によると、平瀬弥四郎は、平瀬家の山崎分家で弥四郎家とされる。

平瀬弥四郎は、貞安の子（寛保元（一七四一）没）が、平瀬弥四郎をはじめて名乗る。

続いて平瀬誠久が弥四郎を名乗る。安永八年（一七七九）没。

その後、平瀬誠本が弥四郎を名乗る。次に文化三年（一八〇六）没平瀬誠本の子平瀬信久が弥四郎を名乗る。山崎本家信久の子万作が山崎本家を嗣ぐ。

延宝五年（一六七七）の西蓮寺梵鐘銘によると、施主は平瀬貞把である。明治時代に西蓮寺の梵鐘を降ろして石碑を建てたもので、平瀬弥四郎は、平瀬貞把の山崎分家とされる。

平瀬弥四郎が所持していたとされることから調査していると、江戸時代に山崎藩主本多氏の祈願寺とされる山崎町春安の願行寺に平瀬氏が奉納されたとされる。ただ、この天國大刀について所在は不明である。

五、鶴木神社の現地調査

鶴木神社は、平成十五年（二〇〇三）六月十三日と平成二十三年（二〇一三）七月十日に現地調査によると、

大鳥居　昭和十五年（一九四〇）三月吉日

紀元二千六百年紀念

鳥　居　安政五年（一八五八）午十月吉辰

鶴木村　稲荷神社

石灯籠　慶応三年（一八六七）丁卯十月　鶴木太明神

石灯籠　文化元年（一八〇四）甲子十月

高麗犬　大正八年（一九一九）己未年五月

百度石

『兵庫県神社誌』附録によると、鶴木神社と記載されている。

鶴木神社　段字藪ノ内

天津彦瓊々杵命

大物主命

金比羅神社は、段村藪の内にある。

金比羅神社の東に、鶴木の「神土樋（かみつちとい）」という小字名がある。

ここは、城下地区南部の水田に水を供給する菅野川の重要な水路にあたる。

写真１　金比羅神社

六、おわりに

『しそうの逸話』に藤村清一氏が城下地区の記事をとのことから金比羅神社（こんぴらさん）について紹介されている。

鶴木の金比羅神社には、戦前から宍粟市内各地から多くの方が参拝されていた。城下地区で、金谷から近く小学校の時には、金比羅神社の祭りに行った記憶がある。また、母が百度参りにいっていたことを子供の頃に聞いたことがある。父が戦争中に中国の黒龍江省の哈爾浜（ハルピン））と現在のミャンマー（旧ビルマ）と戦地にいっていることから無事を祈願することからでした。

私は平成四年頃からおりにふれ書きとどめておいたものを拙い稿であるが紹介させていただいた。

今回、会報に書かせていただくのに文章がまとめられず困難であった。七月十日の午前七時に参拝して調査をしていると、これまで気が付かなかったことがわかり、地元の方にもお聞きしてはじめてわかることもあった。

なお解読不明な箇所が多くあり、今後も調査を進めて行きたいと思っている。ご教示を賜れば幸いです。

参考文献

一、「ふるさとの民話」『城下小学校百周年記念誌』平成四年（一九九二）

二、『しそうの逸話』しそう森林王国協会　平成十八年（二〇〇六）

三、平野庸脩『播磨鑑』宝暦十二年（一七六二）明治四十二年（一九〇九）播磨史談会

四、『特別展　なにわ人物展　没後100年　最後の粋人　平瀬露香』大阪歴史博物館　平成二十年（二〇〇八）

五、『会報十号』昭和三十六年（一九六一）宍粟郷土研究会

六、『兵庫県神社誌』附録兵庫県神職會　昭和五十一年（一九七六）株式会社臨川書店

七、松平定信編『集古十種』一九〇八國書刊行会　一九八〇　株式会社名著普及會

写真２
石灯籠　文化元年
（１８０４）

写真２－２
石灯籠 慶応三年
（１８６７）

写真２－３　鶴木太明神

写真４　百度石

写真３　高麗犬
大正八年（１９１９）

写真５　大鳥居 昭和十五年（１９４０）三月吉日

写真６　稲荷神社鳥居
安政五年（１８５８）
午十月吉辰　鶴木村

宍粟鉄（千草鋼）は宍粟市の宝

河本雅視

一、鉄はいつ頃から

山崎町にある「山崎歴史郷土館」が宍粟市立図書館の二階にある。ここは山崎の歴史が詰まったところであるが、その入り口のショウケースに古墳時代の鉄製の太刀がある。赤錆びてはいるが銀の象嵌がはめ込まれた装飾太刀であったようであり、当時は立派な物であったであろう。その他鉄製の馬具（轡）等の鉄製品や埋葬者の装身具が、そして壁面のケースには土器類が陳列してあるが、これらは、山崎東中学校建設に先だって発掘された古墳に埋葬されていた鉄製品等である。

また、一宮町にある宍粟市歴史資料館へ行けば、ここでは当地から発掘された遺物が古代から順次、時代を追って分かりやすく展示してある。今から二千年ほどまえの弥生時代に稲作と一緒に鉄製品や、その製鉄技術が大陸から朝鮮半島を経て日本へ伝わってきたと言われているが、ここ資料館にも古墳時代区分の処には伊和中山古墳からの出土品の太刀、鉄剣、鉄槍、鉄鏃（矢尻）が、また安黒御山古墳群から出土という鉄製の大きく丈夫そうな短甲（甲冑）等が展示してある。

古墳時代には鉄の生産も始まった。とあり、鉄の発見と製鉄の技術の進歩によって鉄は生活全般に亘り無くてはならない物として存在してきたと思われる。

二、タタラ製鉄

今度は千種町へ行くと、西河内にたたらの里学習館と県指定の文化財天児屋鉄山跡（製鉄遺構）がある。ここではそのタタラについての製鉄方法がすべて分かるように展示され、またビデオによる解説もある。つまり、花崗岩が風化して真砂となり、その真砂から良質の鉄（磁鉄鉱）を含んだ真砂砂鉄を鉄穴流しと言う比重選鉱法でたいへんな作業を通して取り出し、その砂鉄と、山で生産した木炭とを土で作った炉の中で、三昼夜連続、ふいごによって空気を送りながら燃やし続け、還元作用により砂鉄から鉄を取り出すことが出来るということである。

しかし出来る製品は砂鉄15トンに対し製品は2トン。約13%であり、あとの87%は鉄滓つまり俗に言う金くそとして放棄された。ところがこの鉄滓にはまだ44～48%の鉄分を含有しており、戦時中の鉄不足の時、広畑製鉄に送り出し精錬されたようである。

昭和十九年四月～五月、東北大教授であつた田辺健一博士が宍粟へこられタタラ付近に捨てられていた鉄滓量とタタラ跡の調査をされた。それによると、千種町にはこのようなタタラ製鉄遺構が大小であるが147カ所、また、波賀町には65カ所、一宮町には14カ所、山崎町には41カ所、宍粟市全体では合計267カ所あったと報告されている。これらのタタラ製鉄所に於いて良

質の鉄鋼が沢山生産され、備前長船の刀工等によって名刀や、その他農具などの鉄製品が作られたということである。

三、国宝を生んだ宍粟鉄

また、波賀町では鎌倉時代末期、備前長船の刀工景光と景政が三方西（現波賀町）において三振りの刀剣を鍛刀し、その内の一振りは現在御物（皇室所蔵品）あと短刀一振りと太刀一振りは何れも国宝で、現在埼玉県立博物館所蔵となっている。これら太刀の銘文には願主、作者、制作場所、制作年月が明記されていると言うことである。

このように、宍粟鉄（千草鋼）から多くの国宝級の名刀が作られている。宍粟から生産された鉄を、インターネットや図書で調べると、「鉄鋼と言えば十五世紀初めに有名な千草鋼、出羽鋼が出現します。」とあり、宍粟鉄は千草鋼というブランドの名称で古くから全国的に知られていたことがわかる。

ちなみに出羽鋼は島根県奥石見産である。

四、中国山地の砂鉄

中国山地には花崗岩や閃緑岩等が風化して出来た砂鉄があるが、2種類あって、一つは真砂砂鉄であり、他の一つは赤目（あこめ）砂鉄である。真砂砂鉄は花崗岩などが風化して出来たもので良質の磁鉄鉱を主体とした砂鉄であり、刀剣を作るのに適した鉄鋼が出来る。また赤目砂鉄は閃緑岩などが風化して出来たもので赤鉄鋼や褐鉄鋼が混じっており、銑鉄をつくり鋳物に用いられた。中国山地は赤目砂鉄が多い中、西部の島根県石見地方と東部の宍粟には真砂砂鉄が豊富にあったということである。

五、宍粟から生産された鉄の量

ところで宍粟は古代から明治に至るまで、山間部に於いて沢山の良質の鉄を生産し、世に送り出している。その量も上記の田辺健一博士の調査によると、宍粟全体の総鉄滓量では３１・７万トンと報告されているから、このことから製品として出荷した鉄の総量を逆算してみると約４・７万トンもの量である。４トン積みトラックで積み出すとすると１万１７５０台必要である。しかし当時は山越えで牛馬を使い、また人の背を借りての重い鉄の運搬は大変な作業であったと思われる。

六、おわりに

現在、鉄は身の回りに有り、台所の包丁をはじめあらゆる機器、器具、乗り物、建築材等に使われており無くてはならない存在である。

歴史を振り返れば、明治のはじめ西洋から新しい製鉄法が入り、タタラ製鉄に取って代わられたが、それまで古代から中世、近世と長い間人間生活にとって貴重な良質の鉄を供給し続けて来た宍粟のタタラ製鉄の製法と高度な技術は現在でも高く評価されており、また良質の砂鉄を産出した土地、そして多量の木炭が供給で

きた森林など恵まれた自然があり、かつては良質の鉄を産出し、多くの名刀を、そしてあらゆる生活の鉄製品を生み出した宍粟のタタラ製鉄は宍粟市の重要な文化遺産であり宍粟市の宝であると思われる。

事務局だより

平成二十三年度の通常総会が開催されました

去る四月十日（日）午後二時より、宍粟防災センター四階ホールにおいて開催され、二十二年度の諸事項及び二十三年度の事業計画等が承認されました。

また、役員の改選の年にあたるため選考委員による選考の結果、次ページに記載の方々が就任（再任）されました。

二十三年度の研修旅行のお知らせ

予定の日　平成二十三年十月二日（日）

行き先　岡山県総社市　高梁市　鬼ノ城址　高松城址　足守藩武家屋敷他

今年はや山崎文化協会と共催です。詳細については計画中です。多数のご参加をお願いします。

役員名簿　平成二十三・二十四年度

役職名	氏名	住所	電話
会長	春名　俊夫		
副会長	浅田　耕三		
事務局長	宗平　圭司		
会報部長	大谷　司郎		
研修部長	垣口ちゑ子		
史跡部長	伊野　操治		
山崎地区西支部長	垣口ちゑ子		
山崎地区東支部長	柳田　弘		
山崎地区北支部長	伊野　操治		
城下地区支部長	片山　英之		
戸原地区支部長	金山　敞史		
河東地区支部長	衣笠弘一郎		
神野地区支部長	春名　俊夫		
蔦沢地区支部長	宗平　圭司		
菅野地区支部長	河本　雅視		
土万地区支部長	赤松　茂毅		
監事	河本　雅視		
監事	三宅　保雄		

平成二十三・二十四年度　各部構成

部	氏名
会報部長 大谷司郎	河本　雅視
	浅田　耕三
	片山　昭悟
	鎌田　裕明
研修部長 垣口ちゑ子	石野　和雄
	西川　博敏
	宗平　圭司
	坂本　忠彦
史跡部長 伊野操治	柳田　弘
	伊藤　一郎
	横野　正浩

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S
スタジオウエヤマ

●山崎店　兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL(0790)62-8027
FAX(0790)62-8827

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS

本　　店　TEL(0790)62-0700
さつき通り　FAX(0790)62-2117
ブックランド店　TEL(0790)64-2051
山崎町中井　FAX(0790)64-2052

パンフレット・デザイン広告・名刺・封筒・伝票
新聞広報誌・ポスター・案内状・シール等

(有)稲田印刷

〈本　社〉〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL(0790)62-0254 FAX(0790)62-4764
〈一宮店〉〒671-4133 兵庫県宍粟市一宮町須行名496
TEL(0790)72-8600 FAX(0790)72-8611

まごころを伝えます。
地酒
一献献上　品質本位
播州一献
山陽盃
酒造
確かな品質と味わい。
SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28
TEL.0790(62)1010　FAX0790(62)6218
E-mail　info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光

〒671-2576　兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL(0790)62－7588
FAX(0790)62－0770

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司あらき
本　店・播州山崎町さつき通り　電162－0170

外科・内科
山中医院
院長　山中潤一
山崎町西町・TEL(62)0036

生谷温泉(いぎだに)伊沢の里
いつも伊沢の里をご利用くださいましてありがとうございます。心から感謝を申し上げます。
これからも、是非、お祝い、ご法要、ご会食、団欒など会席料理から鍋物、そして定食など、なんなりと是非お申し付けくださいませ。ご予算に応じて調理させていただきます。
また、無料送迎バスもご利用ください。
おいでをお待ちいたしております。
Tel.0790-63-1380　Fax.0790-63-0362